

新世紀ミュージアム

人類の文化の起源を探る手がかりとなる石器や岩絵。これらにはむかしも今も変わらない人の思いや生き方が刻まれている。本号では、南アフリカ共和国の大学博物館の展示をとおして、狩猟採集民の文化の歴史をひもとく。

アフリカ大陸は、およそ三〇万年前に現生人類ホモ・サピエンスが誕生した土地といわれる。なかでも南アフリカでは、現生人類以前に存在したとされる猿人

アウストラロピテクス属の遺跡も発見されていて、古くから人類の起源を探る研究が盛んである。二一世紀になっても、洞窟で新種の人類と推定される骨が発見されている。その研究の中心地が、国内最大の都市ヨハネスブルグにあるウィットウォーターズランド大学である。この大学は、化石人骨研究で有名なフリップ・トバイアス、岩絵研究のデヴィッド・ルイス、ウィリアムズなどの教授がかつて教鞭をとっていたこと知られる。わたしは、今年の二月に、この大学に



エランドが描かれている岩絵

付属する「オリジンセンター」(二〇〇六年開設)を訪れた。ここは、先史から現在までを三つのコーナーにわけて、各時代の「狩猟採集民」の暮らしを紹介しているミュージアムである。

人類の起源と現在

最初のコーナーの壁面には、時代別に石器が並べられている。前期旧石器時代(四〇〇万―二〇万年前)、中期旧石器時代(二〇万―四万年前)、そして後期旧石器時代(四万―一万年)の順に石器が小型化して、しかも全体の形が鋭利になっていくのがわかる。とりわけ、七万五〇〇年前のブロンボス洞窟の遺跡の紹介が印象深い。パネル展示ではあるが、オーカー(黄土)をつけた石材、穴のあいたムシロガイの貝殻などが紹介されており、人類が古くから美しさを求めた証拠ともいえる資料を見ることができ。この遺跡は、人類最古のアートが四万年前のヨーロッパにさかのぼるとす



アフリカで最大のアンテロープ類、エランドの剥製

る当時の見解をくつがえした。

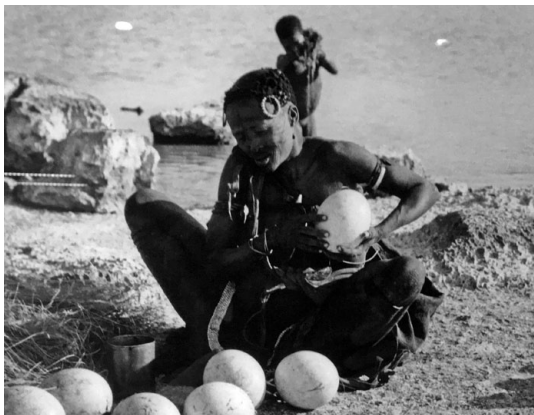
次は、岩絵のコーナーである。南アフリカ国内には、数多くの岩絵が存在するが、センター内には数千年前のものとされる一枚の岩絵(レプリカ)が紹介されていた。それは一頭的大型動物が座っていた。それは、そのまわりに弓矢をもった人が立っている絵で、当時の狩猟の様子を彷彿とさせるものであった。わたしは、カラハリ砂漠での狩猟体験から多くの動物を見てきたので、短い角や体色の模様からその動物がエランドであることはすぐにわかった。展示場にはエランドの剥製も置かれており、その姿は頭を地面につけて、今にも倒れそうである。察するに剥製と岩絵のエランドは、弓矢の矢尻につけられた毒がまわって弱っているの

住民サン(ブッシュマン)の文化のコーナーである。運搬用ネットのなかの二個の卵殻と水場での写真によって、かつてサンが水筒代わりにダチョウの卵殻を利用していたのがわかる。さらに印象に残ったのは、卵殻製のビーズで装飾された腰巻きである。ビーズは、皮に縫い込みライン模様をつくるのみならず、貝殻と一緒にするしてある。女性が踊ると音が出るような仕掛けである。また、サンのトランスダンスによる治療の映像も流れていたが、ほかのコーナーで狩猟採集民の世界観について知ることができたため、治療についても理解しやすい気がした。さらに、サン語によるラジオ放送が

また岩絵の近くには、スプリングボックという動物から名前をとったラグビートームのパネルも展示されていた。さまざまな動物が描かれた岩絵とあわせて見てみると、パワーやスピードを求める人びとの思いは、時代を問わず、それを象徴する動物に託されていたことがわかる。

先住民の文化

最後は、南部アフリカに広く暮らす先



ダチョウの卵の殻の水筒に水を入れるサン

あることも紹介されており、興味深いコーナーであった。

数万年続く狩猟採集民の伝統

オリジンセンターの展示構成は、南アフリカの考古や民族の特性を生かしたものであった。人類の歴史の九九パーセント以上は狩猟採集民の時代であったといわれるが、なかなかピンと来ない。しかしながら、動物とのかかわり方、ビーズを身に着ける習慣、絵を描くという行為などは、現代のわたしたちにも狩猟採集民の伝統が息づいていることを教えてくれる。



ダチョウの卵の殻を装飾に使った女性用腰巻き